

序文：大学の国際交流

2011 年に制定された本学の国際交流ポリシーの前文に、「大学における研究活動のグローバル化はもとより、高等教育の国際市場化、大学卒業生雇用の国際化が進む情勢の中で、... 中略 ... 『室蘭工業大学国際交流ポリシー』を制定した」との記述がある。まさに、この前文にある、「研究活動のグローバル化」、「高等教育の国際市場化」、「大学卒業生雇用の国際化」の三つの観点は大変重要なキーワードであると考えられる。

特に、「研究活動のグローバル化」を強調したい。すでに、国際会議に参加して発表・研究討論を行うことは大学研究者や大学院学生にとっては日常的な活動となっている。そして、学会活動から一歩進めて国際共同研究を企画・運営していく時代を迎えている。日本学術振興会のアジア・アフリカ学術基盤形成事業や JST の SATREPS 事業を実施した筆者の経験から、国際共同研究の実施は、文化や思想の異なる研究者がビジョンを共有して研究活動を推進することであり、互いの文化を尊重し、かつ、一つのチームとして協働していくプロセスの実践であると強く認識している。そして、研究者間の協働が学生の相互交流へと繋がり、留学・インターンシップへと拡大していくことも経験している。すなわち、研究活動のグローバル化が、高等教育の国際市場化への対応となり、かつ、大学卒業生雇用の国際化を日常的なものにしていくと確信している。

世界的に活動している企業や国際機関では、多様な人種の人たちが互いの文化や思想を認め合い、日常的にチームとして働いている。大学は常に社会の先頭を走っていると認識している、また、走るべきとも考えている。大学がまず、日常の研究・教育活動を多様な人種と文化の異なる人たちで作上げていく必要がある。すなわち、大学が「国際化」する必要があると考える。特に、これから大学を卒業していく学生諸君は、「国際化」した会社の中で働くと思われる。科学・技術とは極めてユニバーサルな価値であり、この価値を売り物にする会社では、特にこの傾向は強くなっていくと考えられるからである。

現在、本学は 49 大学と国際交流協定を締結し、教員・学生の交流や共同研究活動を実施している。広辞苑によると、交流とは「文化・思想などの潮流が相交わること」とされている。私たちは、相交わせることができる、文化・思想を確実に持っているかどうか、もう一度確認しなければならないと考える。

COVID-19 の世界的な感染拡大の影響で、学生の派遣・受け入れや研究者の相互訪問などの Face-to-Face (F2F) の活動が難しくなっている。そして、リモートでの会合が主力となっている。国際会議やワークショップがリモートで開催され、通常は費用の点から参加が難しかった開発途上国の研究者も会合に参加するようになっていく。研究集会が極めて容易に開催されるようになり、以前より海外の研究者と話をする機会が増えたように感じている。日本が地球の時間設定の一番東に位置するため、会合の時間が深夜になることを割り引いても、リモートの価値が高いことを実感させられたこの 9 か月であった。情報の動きはもとより、これからは人の動きも光の速度でこの地球上を駆け巡ることになる予感を持っている。その時こそ、F2F の価値を明確に理解し、「文化・思想などの潮流が相交わること」に努めていかねばならないと考える。このことが、大学が国際化し、キャンパスの中で「国際交流」が日常となることにつながると考える。

国際交流センター長
船水 尚行